仏教法話

―心のひかり・人生のしるべ―

善き友・善き仲間・善き人々

努め励むこと

お釈迦さまと大王さまの対話です。

大王さまがお釈迦さまにききました。

『お釈迦さまのみ教えは、善き友、善き仲間、善き人々に取り巻かれている人のためのものであり、悪い友、悪い仲間、悪い人々に取り巻かれている人のためのものではありません。』と。

お釈迦さまは、その通りです、その通りですとお答えになりました。

そして修行僧アーナンダとの対話を紹介しました。

アーナンダは次のように申しました。

『尊いお方さま！善き友のあること、善き仲間のいること、善き人々に囲まれていることは、清浄行の半ばに近い』と。

お釈迦さまは次のように答えられました。

『アーナンダよ。そうではない。そうではない。善き友をもつこと、善き仲間のいること、善き人々に取り巻かれていることは、清浄行の全体である。』と。

（ブッダ　神々との対話　一九一頁）

まことに、善き友、善き仲間、善き人々に取り巻かれていると、人は自然と善き友、善き仲間、善き人となろうと努め励むのであります。

お釈迦さまは大王さまに次のように示されています。

『大王さま、あなたが努め励んでいるならば、関係する人々は次のように思うことであろう。「王様は、怠らぬことにもとづいて、努め励んでおられます。さあ、われらもまた、怠らぬことにもとづいて、怠らず努め励みましょう」と。』

お掃除をしましょう

ある山小屋の社長さんのお話です。

社長を引き継いだころの山小屋は社員の心が

荒れていて、その結果、トイレは臭く真っ黒で汚れが付いたままでした。その社長さんが始めたことは、トイレ掃除でした。一人で十五年も毎朝トイレ掃除を続けたのです。

社長さんのトイレ掃除の後姿を見て、そしてトイレがピカピカにきれいになると、社員は変わりました。トイレ掃除を一緒にやるようになりました。そして何よりも自分から気付いて働くようになりました。下足で内に入らない。汚れていたら進んで掃除する。机やいすが曲がっていたら直す。はきものがみだれていたらそろえる。

善い社員、善い仲間、善い人々になったのです。

この山小屋は、アンケート調査で毎年日本一の山小屋と評されるようになりました。

すると何としたことでしょう。その山小屋の周囲に住む熊まで立派になったのです。種明かしをしましょう。

社員の気づきにより残飯をきちんと片付けるようになりました。登山者も食べ物を捨てなくなりました。それで熊は熊の領分を守り、山小屋周辺に出没しなくなったのです。

きれいな環境をつくると、心がきれいになります。

心がきれいになると、自然と周囲をきれいにしたくなります。ゴミが落ちていたら拾いたくなります。汚れていたらお掃除をしたくなります。

こうしてきれいな心の輪をつくりましょう。それは善き友、善き仲間、善き人々の輪となって善き行動に努め励むことにつながるでしょう。

あいさつをしましょう

あいさつは心の交流であり、安全安心なまちづくりにつながります。

あいさつのポイントは、先手の明るい挨拶です。

見知らぬ人に「おはようございます。」と声をかけるのは、勇気がいります。でも、声をかけてみると、笑顔や挨拶が返ってくることが多いのです。

登山の山道であいさつを交わすのと同じですね。

ある街で、安全安心な街づくりと、子どもたちの見守りと、市民の交流を目指してあいさつ運動が始まりました。たくさんのタスキと幟旗を用意し、市民会館を満席とした開始式で壇上からあいさつを交わす開始宣言をすると、会場全体があいさつに包まれ、感動が沸きました。それから十年、毎月十一日の街頭行動日には、区長さん方が危険な交差点に立って、小学生児童を見守りあいさつを送っています。学校の校門には、近隣の役員の皆さまが出て、子どもたちとあいさつを交わしています。駅には中学生や高校生や街の関係者が出て通勤通学の皆さまにあいさつを掛けています。

こうして、少しずつあいさつが浸透して善い友、善い仲間、善い街に変わっていくのでした。

私たちの周りにあいさつの花を咲かせましょう。

善いことを怠らず努め励みましょう。すると、善い友、善い仲間、善い人々が集まってきます。霧の中を歩いて自然と露が衣類に沁み込むように、善い心が人々に沁み込み、人々は幸せになれるでしょう。

お釈迦さまがそのように教えてくださっています。

合掌